

戦国大名相良氏の確立

七 相良義滋肖像画（写真）

戦国時代

原本、相良神社所蔵

大永から享禄年間の相良家内紛を解決し当主の座に就いた長唯（義滋）は、八代を本城にして三郡の支配をゆるぎないものにし、天文十四年には官位の受領と將軍の一字を賜り、戦国大名としての相良氏の地位を確立させた人物である。

本肖像画は、折烏帽子を戴き、直垂を着け、右手に中啓（扇）をもつ姿として描かれている。



八 相良長唯・上村頼興連署感状

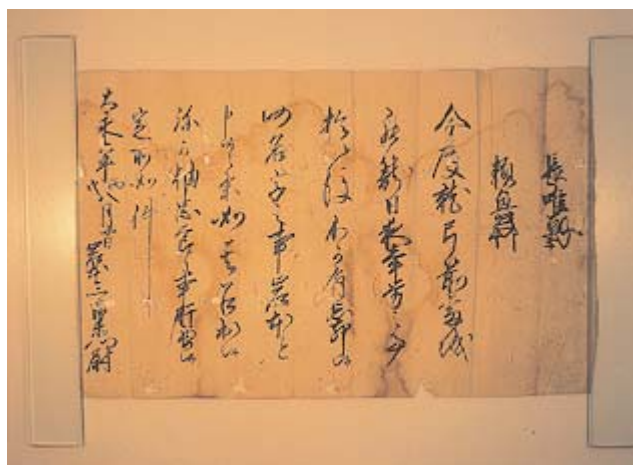
大永六年八月四日

岡本勝年氏所蔵

長唯は相良家相続の内紛に際し、上村頼興の力を借りて瑞堅が籠城した永里城を攻めて内乱を鎮め、相良家の当主となった。

この文書は、長唯方として働いた功績に対して

出された感謝状で、岩本の苗字を与えている。長唯と頼興の連署であるのは、頼興の地位が長唯に並ぶ立場であることを示す。



九 相良長唯宛行状

大永六年八月四日

岡本勝年氏所蔵

武家社会において武士は恩賞を求めて戦場を駆けつた。宛行状は「あてがいじょう・あておこないじょう」と読み、恩賞などの際に土地や所職の給与の文書として作成された。

この文書は、前号の感状とともに出されたもので、須恵庄西村（現在の錦町西村）の水田四段と畑六段を与えるという内容である。

一〇 木造阿弥陀如来坐像

天文五年カ

願成寺所蔵

天福元年（一二三三）に相良家が建立した願成寺では、国重要文化財指定の阿弥陀如来坐像が有名であるが、本像は本堂内右側に安置されている仏像である。

胎内に銘文があつたことが伝えられており、それによれば、相良長唯と嫡子長為の二人の寄進により仏師快庵が天文五年に阿弥陀三尊を完成させている。家門繁栄・武運長久・子孫昌盛とともに球磨郡・葦北郡・八代庄・守山・小野村・豊福庄・豊田庄・牛屎院といった所領の領中康寧を祈願するための造仏であつた。



一一 稲留家の馬具

天文五年（一五三六）三月日

稲留成長氏所蔵

元は相良家使用の馬具で、鞍は戦国時代に漆工芸の盛んであった加賀国で製作されており、波鶴紋の蒔絵を施す。鐙や相良家紋入りの面懸（江戸時代の作）や手柄杓も完全に残されている優品であり、在銘の馬具としては県内最古のもので熊本県指定重要文化財となっている。



一二 相良義滋式目併遺状写

天文十五年八月十五日

熊本県立図書館所蔵

天文十五年八月十五日、義滋は二十一箇条の式目を制定するとともに、遺言状を書き残し、八月二十五日に死去している。

法令である式目・法度は、相良家においては為続・長每・義滋・晴廣・義陽が制定している。義滋は、士農工商の原則、君臣のあるべき姿、勉学の励行、神社仏閣の修理、女性の夜行の禁止、子供の飲酒の禁止などをあげている。

遺言状には、前年の官位と將軍の一字拝領は相良家にとって名誉なことであり、今後とも一層励み家名を守るように言い残し、辞世の句を読んでいる。

一三 相良晴廣肖像画（写真パネル）

戦国時代

原本、相良神社所蔵

十七代当主の晴廣は上村頼興の長子であったが、長唯との盟約によって相良家を継ぎ治世十年、四十三歳で没した。

肖像画は、折烏帽子を載せ、直垂を着け、右手に扇を持つ姿に描かれている。



一四 沙彌洞然長状写

天文五年十一月二十二日

犬童正春氏所蔵

沙彌洞然は上村長國の出家名で、相良晴廣の出した上村氏一族の長老であった。天文五年の晴廣の婚姻にあたり、相良家の故実を語り、税所新兵衛良継に書き取らせてその祝いとしたのが本長状である。

前段に歴代の相良家当主の事跡を述べ、後段で国郡主の心得や信心の心がけ、兵学的重要性、孝道の大切さなど、領主としてのあるべき姿を説いている。

本史料は数ある沙彌洞然長状の写しの中でも伝来した犬童家文書の古さや巻装仕立てとなっていることから早い時期の写しと考えられている。



一五 相良義陽肖像画

江戸時代前期

相良神社所蔵

相良家当主の中でも弘治元年（一五五五）に若年で家を継ぎながら、始終戦乱に生き、そして敗死した義陽は、悲運の武将と称えられた。

義陽の肖像画は冠を戴いた束帯姿で朝服となっているが、右手の笏は床に立てており、太刀を佩くものの鐔に手をかけた姿で描くのは武人としての性格を良く著している。



一六 相良頼房感状

弘治三年（一五五七）七月十六日

入吉市教育委員会所蔵

樅本文書の一通で、上村三兄弟の謀反に絡んだ弘治三年七月九日の葦北の久木野城での合戦の際、出陣した樅木庫助宛に出された頼房（義陽）の感謝状である。

義陽の代は戦乱に明け暮れたこともあるが、義陽は多くの感状を家臣に授けており、配慮に長けた武将としての一面が知られる。

一七 相良頼房感状

（永禄元年）正月二十日

佐無田 穆氏所蔵

弘治三年八月、上村三兄弟の乱に際して、薩摩の兵が上村頼孝の援軍として笠木峠を越えて大畑に侵攻した。佐牟田兵部少輔はこの戦いで大畑口において敵を撃退した。この文書は、その功績に対しての感状と考えられるものである。



一八 相良頼房感状

（永禄二年）六月二十四日

佐無田 穆氏所蔵

永禄二年（一五五九）五月、入吉の老若（老中）である丸目兵庫頭の謀反を引き金とする球磨を二分した頼野原大合戦がおこった。この時、佐牟田三良左衛門尉頼秀は奥野一度橋の戦いで戦死したため、その息子である十四歳の仙千代に心配しないように伝えている。佐牟田仙千代は長じて長堅（城之介）と称し、大畑城主として薩摩境の警護を行なっていたが、天正六年に島津方に銃殺された。



一九 佐牟田仙千代知行目録

永禄三年二月九日

佐無田 穆氏所蔵

頼房（義陽）は仙千代に前号の感状のとおり知行目録を下し、父の功績に対する恩賞とした。知行地は別に目録があり、三石（相良村）、西の村（錦町）の田畑で合計七町一反の給付であった。

二〇 岡本頼氏戦場日記

岡本勝年氏所蔵

岡本河内守頼氏は、元は岩本姓で名を頼真とも称し、天文六年生まれの代表的な戦国武将である。十九歳の初陣を始めとして出陣十九度、負傷の傷三十一箇所、七通の感状を得ている。

この戦場日記は後年に戦場での粉骨の覚書として作成された文書で、弘治三年の上村頼孝の簞城した岡本城攻撃から永禄二年の瀬野原大合戦での久米城攻撃や米良氏討ち取り、永禄七年の真幸笥力尾戦の退却で殿（しんがり＝最後尾）をつとめたこと、永禄十年以降の大口方面での島津軍との戦い、天正十五年の豊後退却での殿としての活躍までが述べられている。当時の城攻めの様子や城の防御法を知ることのできる貴重な史料でもある。



二一 相良頼房感状

（永禄七年）三月二十七日

岡本勝年氏所蔵

前号の戦場日記にも見える真幸の馬関田城攻め（三月十一日）の功績にたいしての頼房（義陽）の感状である。冒頭で頼房は瀬野原大合戦での功績を今も忘れていないよ、と領主の心遣いがしのばれる書状である。



二二 岡本河内守頼真使用刀

大永三年二月九日

岡本勝年氏所蔵

岡本頼真が帯刀したと伝わる刀で、銘に「越中国中條兼勝作、大永三年二月九日」とある。戦国時代初期の作刀で、刀身の長さ七一八ミリ、反り二七ミリ、茎長さ一七六ミリを測る。

二三 牛塚毘沙門堂鰐口

永正九年霜月（十一月）吉日

人吉市牛塚町内会所蔵

鰐口は仏堂の入口の頭上に掛け、礼拝の際に鳴らす青銅製や鉄製の仏具であるが、戦場となったところではしばしば略奪され陣鉦の代わりを使用した。戦後は戦利品として出陣先から持ち帰り所領の仏堂に寄進されている例がある。球磨地方の中世鰐口にはその例が多く遺存しており、北は豊後国、南は大隅国加治木の仏堂にあったものが確認されている。

牛塚の毘沙門堂の鰐口は、銘文に「大日本国肥後島海東郷須郷村江福寺鰐口 干時永正九年壬申霜月吉日 願主比丘契昌等」とあり、相良氏が小河・海東に出陣した時の戦利品とみられる。



二四 西門釈迦堂鰐口

文明十九年四月吉日

若竹英志氏所蔵

人吉市下原田町西門釈迦堂の鰐口は、銘文に「薩島阿久根院底廣大禪寺鰐口 願主大石成續干時文明十九年乙未四月吉日 敬白」とあり、相良氏が阿久根に進出した際の戦利品とみられる。

西門釈迦堂鰐口



観音寺観音堂鰐口



二五 観音寺観音堂鰐口

文安五年戊辰三月日

観音寺所蔵

人吉市願成寺町所在の観音寺境内の観音堂にある鰐口は、銘文に「奉施入 肥州天草郡上津浦庄妙楽寺薬師如来御寶前 文安五年戊辰三月日 大願主上総介大藏朝臣種和併万寿方月敬白」とあり、相良氏が上津浦に攻め入り番衆を置いた天文元年の戦利品と推定される。

二六 相良義陽書状写

三月七日

熊本県立図書館所蔵

義陽から夫人の「於くに」宛に出された仮名書きの消息文である。亀千代（忠房）・長寿丸（長毎）・藤千代（長誠）三人の息子の健康を気遣い、手習いや歯の養生、未っ子の持病についてしっかりと養生しなさい、などと武将を離れた父親としての愛情を窺わせる内容である。

二七 願成寺再興棟札写

永禄七年十月二十八日

願成寺所蔵

願成寺は創建以来、度々の類火に見舞われ、相良当主はその再興に力を注いでいる。

大永六年の瑞堅の乱で願成寺は類焼し壊滅的な被害を受けた。この史料は永禄三年から七年にかけて行われた再興の成就に際して作られた棟札の銘文を享保二十年に写したもので、頭を接する形で記している。



二八 響野原合戦図写

昭和七年写本

熊本県立図書館所蔵

享和二年に藤原（井口）美辰が作成した写本を昭和七年に写したもので、原本および井口美辰写の所在は現在不明である。

天正九年に島津氏の配下となった相良義陽は、阿蘇氏攻略のため先鋒として益城郡に攻め入るが、響野原（豊野村）に野営し酒宴中を阿蘇氏の家臣甲斐宗運の奇襲によって討たれて最後をとげる。

絵図は響野原の義陽軍の布陣と寄せ手の甲斐軍の陣と兵の動きを表したものである。

